

のであるから、それだけに私たちの頭の中でいろいろな破損の状況を作り得る。そのため、「こわれる」も「くずれる」も使われやすい。他に「夢」などがある。

(33) 彼に対するイメージは こわれた。

(34) 彼に対するイメージは くずれた。

もし、「彼に対するイメージ」が、とてもすばらしく、理想的で、美しく、完璧なひとつの形となっているものなら、それは、「くずれる」より「こわれる」ものであろう。もし、「彼に対するイメージ」が、彼と私との長いつき合いの中のいろいろな出来事によるひとかけらひとかけらで作っていったものだとしたら、それが破壊される時は「こわれる」というより「くずれる」と言えるだろう。2.3.1.や2.3.2.で言っていることは、抽象名詞についても言えるのである。

(35) 形が こわれる。

(36) 形が くずれる。

(37) 体調が こわれる。

(38) 体調が くずれる。

これらの例の「くずれる」は、2.2.と多少似ている。「くずれる」の場合は、物質の秩序が保たれている範囲内で、物が乱れているという意味である。「形」や「体調」の乱れ具合が小さいと「くずれる」で、大きいと、「こわれる」を用いているようである。これらは同じ抽象名詞でも「イメージ」などとは違う「こわれる」「くずれる」の使い方をする。「イメージ」「夢」は、2.3.1.や2.3.2.で述べたように、「こわれ方」「くずれ方」の違いや、形を重視してるか、有様を重視してるかのちがいで、「こわれる」「くずれる」を使いわけられる。けれども、「形」や「体調」では破壊される度合で区別される。

#### 2.4. 派生的用法

(39) お金が こわれる。

(40) お金が くずれる。

大きな単位のお金を、同額の小銭に替えるという意味である。この意味は辞書では「くずれる」の方にしか載っていないが、両方用いられるように思う。

(41) 縁談が こわれる。

(42) 縁談が くずれる。

これは「こわれる」の派生的用法で、話・約束ごとがだめになる意味である。

### 3. まとめ

こわれる (1) 機能が衰えたり、失われたりすること。  
(2) 整った形が乱れる意は含まない。  
(3) こわれ方については、対象物を構成しているものが、破壊され、バラバラに散って、ひび割れたり欠けたりして、いくつもの破片(かたまり)となること。  
(4) 完全な形をもったものが、その形を失ってしまうこと。(形の変化に視点を置く。)

くずれる (1) 機能に関与するか、しないかは関係ない。  
(2) 構成している物質の秩序を狂わすことがない程度にものが乱れること。  
(3) くずれ方については、対象物を構成しているひとつひとつのものが、バラバラになっところがり落ちること。  
(4) 形が破損されていく有様・状況をいう。(過程・有様に視点を置く。)

言語経歴：0歳～7歳宮崎市 7歳～9歳  
立川市 9歳～18歳船橋市  
18歳～ 所沢市

## やぶる・やぶく・さく・きる・わる

### 嘉悦真理

#### 1. はじめに

一つのをいくつかに分割・破壊する場合に、私たちはいくつかの動詞を無意識のうちに使いわけている。身辺でよく行なわれる動作であるだけに、しばしば口にしてはるが日頃は迷いや混乱を覚えずにその場にふさわしい動詞を選んでいる。では、その動

詞をその場に最もふさわしいものにしてあるポイントは、どこにあるのだろうか。「やぶる・やぶく・さく・きる・わる」を取り上げて、そのポイントを探してみたい。

## 2. 分析

### 2.1. 対象物の種類

- (1) 紙を やぶる。
- (2) 紙を やぶく。
- (3) 紙を さく。
- (4) 紙を きる。
- (5) ×紙を わる。
- (6) カーテンを やぶる。
- (7) カーテンを やぶく。
- (8) カーテンを さく。
- (9) カーテンを きる。
- (10) ×カーテンを わる。

「わる」は、対象物に紙や布をとることはできない。もっと厚みのあるもの、例えば「マンガ本」のようなものを対象物としても同じである。しかし、

- (11) 杉の板を やぶる。
- (12) ×杉の板を やぶく。
- (13) ×杉の板を さく。
- (14) 杉の板を きる。
- (15) 杉の板を わる。
- (16) ガラスを やぶる。
- (17) ×ガラスを やぶく。
- (18) ×ガラスを さく。
- (19) ガラスを きる。
- (20) ガラスを わる。

のような例を見ると、「マンガ本をわる」が言えないのは厚さの問題ではないことがわかる。同じ程度の厚さであっても「マンガ本」を「わる」ことはできないが、「杉の板」や「ガラス」を「わる」ことはできる。また、紙のように薄くともガラスであれば、「わる」とは言えるが、「やぶく」とは言えない。このことから対象物の厚みより、材質の差による、手段や動作後の状態の違いに問題があることがわかるが、その点については分析2.2.、2.3.で取り上げる。

- (21) ×石工が 敷石を やぶる。
- (22) ×石工が 敷石を やぶく。
- (23) ×石工が 敷石を さく。
- (24) 石工が 敷石を きる。
- (25) 石工が 敷石を わる。

のように石や氷は「きる」「わる」を用いるが、

- (26) 城の石垣を やぶって 敵が 攻めこんできた。
  - (27) 氷の壁を やぶって 福寿草が 芽を出した。
- など、石や氷を「壁」や「垣」としてとらえると「やぶる」も使うことができる。天井や垣根なども同様に「やぶる」と言うが、これらの例は、対象物をいくつ

かに分ける・バラバラにする動作を言っているのではなく、対象物を破壊することでその持つ機能を失なわせることを指している。「やぶく」「さく」「きる」「わる」には、このような「やぶる」の意味がないために、(26)(27)のような場面では用いられないのである。

柱・棒状のものはどうだろうか。

- (28) ×丸太を やぶる。
- (29) ×丸太を やぶく。
- (30) ×丸太を さく。
- (31) 丸太を きる。
- (32) 丸太を わる。

この例では、面的な広がりを持つガラスや敷石などと差がない。しかし、同じ柱状のものでも

- (33) 雷が 太いイチョウの木を さいた。

は言える。丸太を横に挽くことは「きる」であって「さく」とは言わない。「さく」は木のせんに従って切り離すことをいう。

そこで次に平行な断面を生ずるものを考えてみる。

- (34) スルメを さく。
- (35) 竹細工の竹を さく。

この例は、「さく」を使うのが最も自然である。「さく」は、生ずる断面が直線的で平行であるという特徴を含んでいるようだ。

線および糸状のものでは、「きる」のみが使える。

- (36) 糸を きる。
- (37) 髪の毛を きる。
- (38) 電話線を きる。

これは、「きる」にはくつながつているものを断つ」という特徴があるためだと思われる。「やぶる」「やぶく」「さく」は、表面に傷がついたり、穴があいたりした状態でも使うことができ、対象物が分断されたり、ひとつつながりになっていたものが切り離されたりしなくともよい。しかし「きる」と、対象物はそれまで保っていたつながりを失い、多くの場合、分断される。

対象物の硬さを考えるとどうだろうか。

- (39) カワラを わる。
- (40) ×カワラを きる。
- (41) ×肉を わる。
- (42) 肉を きる。

この例では、一見「わる」は柔らかいものには用いることができないようだが、

- (43) まんじゅうを わる。
- (44) みかんを わる。

のように柔らかいものの例もある。また、前にあげた

- (19) ガラスを きる。

(24) 石工が 敷石を きる。

と比較すれば、(40)が言えないのもカワラの硬さが原因ではない。つまり、「きる」「わる」の用法の違いは、対象物の硬さ、柔らかさにあるのではなく、力の加わり方、手段の差と考えられる。

液体や、おかゆのような流動体、また、気体も対象物とはならない。これは力を加えても断面や断片を生ずるだけの固さや実体を持っていないためである。

## 2.2. 手段

- (1) 紙を やぶる。
- (2) 紙を やぶく。
- (3) 紙を さく。
- (4) 紙を きる。

は、いずれも言える。しかし、ハサミを本来の用法によって用いると、

- (45)<sup>x</sup>紙を ハサミで やぶる。
- (46)<sup>x</sup>紙を ハサミで やぶく。
- (47)<sup>?</sup>紙を ハサミで さく。
- (48) 紙を ハサミで きる。

となり、「きる」だけが言える。「さく」は不自然であるが言えなくはない。「やぶる」「やぶく」はまったく使えない。

では「きる」と「さく」の差は、どこにあるのだろうか。

- (49) 紙を ハサミで 丸く きった。
- (50)<sup>x</sup>紙を ハサミで 丸く さいた。
- (51) 壁紙を ナイフで きった。
- (52) 壁紙を ナイフで さいた。

このような用例を見ると、同じ刃物であってもハサミとナイフとでは違いがあるようだ。また、ナイフは、

- (53) マットレスを ナイフで さく。

というように、ものの表面に傷をつけるだけで切断面が下まで達していない状態のとき、

- (54)<sup>x</sup>マットレスを ハサミで さく。

とは言えない。

「さく」が直線的な切断面を持つことは、

- (55) ハサミで 布を さいた。
- (56) ハサミで 布を きった。

の二例を比較するとはっきりする。(56)は型紙に合わせて曲線的に裁つことも指すが、(55)は、よく切れる裁ちバサミで一直線にサーッと切り離すような状況で使われる。

その他の刃物としては鋸・包丁・ナタなどが考えられる。

(57) 包丁で スイカを きる／わる。

(58) ナタで 薪を わる。

などのように、包丁は「きる」「わる」が使われる。(58)は(33)の例からすると見えそうであるが、普通は、

(59)<sup>x</sup>マキを ナタで さく。

とは言わない。これは「さく」にとっては、動作の結果対象物が分離することは必須の条件ではないので、ナタのように分断を主目的とする道具とは結びつきにくいのだろう。

刃物であっても、錐・針・槍などは、

- (60) 道場の壁を 槍で やぶった。
- (61) 針で 水ぶくれを やぶく。
- (62) 錐で 風船を わる。

のように「やぶる」「やぶく」「わる」が用いられる。

(63)<sup>x</sup>ふすまを 錐で さく。

(64) 針で 風船を きった。

とは言わない。

これらの道具は「穴をあける」ためのものであり、穴をあけたりわることを「きる」「さく」とは言わない。

刃物以外の道具はどうだろうか。

- (65) 鉄槌で 床板を やぶる。
- (66) ハンマーで 石を わる。

上のような鈍器では、「わる」「やぶる」を使うことができる。「やぶく」も、

(67) 掃除をしていて はたきで 障子を やぶいた。のように対象物が紙の場合などには使える。

「きる」「さく」は刃物以外の道具には使われない。ただし次の様な例もある。

(68) 棒で 殴られて 額を きった。

人間の、最も基本的な道具である「手」はどうだろうか。

(69) 紙を 手で やぶる／やぶく／さく／きる。

これはどれも言える。しかし同じ「手」ではあっても「こぶし」となると、

(70) 握りこぶしで ふすまを やぶった／やぶいた。

とは言えるが

(71)<sup>x</sup>握りこぶしで ふすまを さいた／きった。

は言えない。こぶしが鈍器と同じように考えられるためだろう。したがって、

(72) こぶしで カワラを わる。

とも言える。

## 2.3. 動作後の対象物の状態

(73) 答案用紙を やぶった。

- (74) 答案用紙を やぶいた。  
 (75) 答案用紙を さいた。  
 (76) 答案用紙を きった。

これらの例文は、次の二通りの解釈ができる。

- a. 用紙の端がちぎれたり、穴があいたり、または切りこみが入った状態  
 b. ビリビりに用紙を引きちぎった状態

(73)(74)は、a・bどちらも考えられる。しかし、(75)はbの解釈が一般的であり、(76)はaの解釈が一般的である。

- (77) 赤点のテストを きって 捨てた。

(78) 消しゴムで消して テスト用紙を さいた。この例は言いにくい。(77)では「きる」より「やぶる」「やぶく」または「ちぎる」を用いるのが自然だと思われる。

このことから、「さく」には、穴をあけるとか端を切りとる意味はなく、対象物全体にわたり直線的な切りこみを入れる、または対象物を直線的に切り離すという特徴のあることがわかる。

切断面や断片の大きさ・形・様子を全く考えずに、こわしたりバラバラにすることが「やぶる」「やぶく」である。

- (79) 洋服を 作るので 生地を きる。

これは「きる」しか使うことができない。切断面・断片に注意しながら、きちんと分断することが要求されるからであろう。また、

- (80) 洋服を やぶる。  
 も二つの状態が考えられる。

- a. 布地が切れる。  
 b. 袖などがとれてしまう。

「やぶく」も同様であるが、「さく」「きる」は、

- (81) 洋服を さく。  
 (82) 洋服を きる。

のようにどちらもaの状態と解釈される。布地が切れにくいもの、例えばセーターなどは、

- (83) ？セーターを さいた。

と言うことはない。

「やぶる」「やぶく」がbの状態でも使われるのは「やぶる」のもつ“ものの形をこわし、機能を失わせる”という特徴によるのであろう。袖などがとれてしまっただけでは、服としての機能を果たせなくなる。

- (19) ガラスを きる。  
 (20) ガラスを わる。

は言えるが、

- (84) 石を ぶつけて ガラスを きる。  
 とは言わない。断面がどこに生じるのかわからないま

まにものをバラバラにするときは「わる」を用い、「きる」とは言わない。それに対し、断面を生じる場所が初めからわかっている場合は「きる」を用いるのが原則である。

- (85) スイカを わる。

では、包丁などで切りわけるときにも用いるが、棒などでたたいて分離する“スイカわり”や、下に落としてバラバラにしてしまうような状況でも用いる。

- (86) 和紙を さいて こよりを作る。

これは「さく」を使うのがふさわしい。細長く紙を分断しなければ「こより」は作ることができないので、平行に直線的なすじ目を入れるという特徴をもつ「さく」がもつぱら使われるのである。

- (87) 魚の 腹を さいて 開く。

- (88) 魚の 腹を やぶって 開く。

- (89) 魚の 腹を やぶいて 開く。

- (90) 魚の 腹を きって 開く。

(88)、(89)は、魚がメチャクチャになってしまい、調理が目的の時は、使えない。(90)は言えなくはないが、「さく」の方がより自然である。

## 2.4. 力の加わり方

- (31) 丸太を きる。

- (32) 丸太を わる。

この二文には動作後の対象物の状態の差とも、手段の差ともとれる差異を感じるが、いまひとつ考えられるのは“力の加わり方”の差である。丸太を「きる」ときには「ノコギリ」などを使い、「わる」ときには「マサカリ ナタ」などを使う。これらの道具は刃物という点では共通だがノコギリは刃の部分を対象物に押しあてていくことで分断していくが、マサカリ、ナタは刃の部分に強い力を瞬間的にかけることで対象物を分断する(または断面を生じさせる)という点で違いがある。

このことから「わる」には瞬間的に断面を生じさせるだけの力が必要であると言える。また、その力の加わる方向は、

- (72) カワラを わる。

などを代表とするように、対象物の平面に対して垂直である。一方、「きる」には、

- (91) 金属を 薬品で きる。

のように強い力、圧力は必ずしも必要ではない。

- (92) 卵のカラを わる。

人が料理をしようとするときに卵のカラをこわすことは、(93)のように「わる」としか言わない。しかし、

(94) ヒナが 卵のカラを やぶって 出てきた。  
とは言う。人が卵のカラを「わる」とときには、瞬間的に強い力をかけてカラに亀裂を生じさせ、ヒナが「やぶっ」たときはコツコツと何度もくちばしでつついた結果、ヒビをいれてこわすという差がここに表われている。

(95) ハサミで 布を さいた。

(96) ハサミで 布を きった。

2.2.では、断面についてこの二文を考えてみたが、生じた断面が同じであっても、途中の状況には差が感じられる。布を「さく」場合には、断面が生じていくときの勢いが感じられる。

(95) 衣(きぬ)を さくような 悲鳴

などでも亀裂の走っていく勢いが感じられて印象に鋭さをましている。

### 3. まとめ

これまでの分析にそって、五つの語の持つ意味をまとめてみる。

「やぶる」……対象物に力を加え、元の形を失わせて、それが持っている性質、機能を失わせる。

対象物……面的な広がりを持つもの。

手段……手・鈍器・刃物

断面……不規則

「やぶく」……対象物に力を加えて元の形を失わせる。

対象物……薄く、面的な広がりを持つもので、原則的には手で断面が生じうるもの。

手段……手・刃物・鈍器

断面……不規則

「さく」……対象物に、それを両側にひきはなすように力を加えて、直線的に勢いよく切れ目を入れる。

対象物……力を加えることによって平行な直線が生じうるもの。

手段……手・ナイフ状の刃物

断面……直線的で、平行的

「きる」……ものの持っているつながりを断つ。

対象物……断面を生じうるもの。

手段……刃物・手

断面……原則として切り口はきれいである。意図的に曲線を作りうる。

「わる」……ものに対して垂直方向に瞬間的に力を加えて断面を生じさせる。

対象物……圧力を加えることによって、断面を生

じうるような硬さを持つもの。

手段……鈍器・手・刃物

断面……不規則

### 4. 派生的用法

(96) 関所を やぶる。

(97) 錠前を やぶる。

(98) 記録を やぶる。

(96)(97)は「やぶる」のもつ“ものの機能を失わせる”意味の派生であろう。(98)は、記録という抽象物を、目標、つまり壁のようにとらえているのであろう。また、

(99) 約束を やぶる。

も、(96)(97)と同様の例と考えられる。

(100) 二人の仲を さく。

というのは、寄りそっている二人を“両側にひきはなす”ように別れさせることである。

(101) 口を わる。

(102) 間にわって 入る。

(101)は、それまで口をつぐみ、話さずにいた人がついに話してしまう意味で使われる。これは口を開くとき両唇が断面をつくるように見えるからだろう。また(102)は断面を無理に作って間に入るということを行う。

(103) 残り時間は 3分を きりました。

の例は、時間というものを一つの連続したものととらえての表現と考えられる。

「やぶく」にはこのような派生的用法は見られないようである。

言語経歴：1957年5月 東京新宿区に生まれる。

1965年6月 神奈川県川崎市に転居。現在に至る。